村上春樹文學中的地震
—從《神的孩子都在跳舞》到《刺殺騎士團長》—

葉麥

淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

1995 年發生的阪神淡路大地震造成村上春樹故鄉-神戶嚴重的災情。帶著對家人、故鄉的思念，村上春樹以其為創作理念，在 2000 年完成了《神的孩子都在跳舞》。人們該如何面對帶有暴力性的地震，這個問題隱含在《神的孩子都在跳舞》中。而 2011 年發生東日本大地震（311 大地震）後，村上春樹對核能發電所抱持著批判的態度。接著，2017 年出版的《刺殺騎士團長》終於看到東日本大地震相關的情節。村上春樹把這兩個震撼日本的地震看做是日本成為洗鍊國家的試煉。但是他覺得日本國家的系統還無法對應自如。在兩篇作品中不斷提到人們在地震後只好自立自強，並且背負對家庭的責任。而且更應該要成長，超越血緣關係，對未來的世代盡責。

關鍵詞：地震、暴力、核能發電、家族、次世代

台灣日語教育學報第三十一号

受理日期：2018.08.31

通過日期：2018.11.09

Earthquake in the Haruki Murakami literature: " After the Quake" to " Killing Commendatore"

Yeh, Ling

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

The 1995 Southern Hyogo Prefecture Earthquake caused big damage to the hometown of Haruki Murakami. Haruki Murakami wrote "After the Quake" in 2000 for a family, the hometown. As for one of the subjects, a human being is coping to an earthquake. On the other hand, after having got up by Aftermath of the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami, Haruki Murakami criticized nuclear power generation and wrote "Killing Commendatore" in 2017. Haruki Murakami considers two earthquakes to be a trial of Japan. However, Japan cannot yet cope well. After an earthquake, the human being must become independent. You must assume the responsibility to a family. And can achieve responsibility to the next generation beyond a blood relative; must grow up. In both works, such a thing is talked about repeatedly.

Key words: Earthquake, Violence, Nuclear, Family,
The next generation

台灣日語教育學報第三十一号

村上春樹文学における地震
―『神の子どもたちはみな踊る』から『騎士団長殺し』へ―

葉麦
淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

1995 年に起きた阪神淡路大震災は村上春樹の故郷である神戸に大きな被害を与えている。家族、故郷への思い出を含みながら、村上春樹はそれをモチーフにして 2000 年に『神の子どもたちはみな踊る』を上梓している。人間は如何にして地震がもたらす暴力に対処するかという問題が、『神の子どもたちはみな踊る』に隠れている。一方、2011 年に東日本大震災が起きた後、村上春樹は原発について否定的にコメントし続けている。そして、東日本大震災はようやく 2017 年に出版された『騎士団長殺し』に取り入れられている。村上春樹は、日本に大きな震撼を与えた二つの地震を日本が洗練された国家となるための試練と見ている。しかし、日本という国家のシステムはまだ上手く対応しきれていないと村上春樹は考えている。こうして、地震の後、人間は自立するしかない。また、家族への責任を背負わなければならない。さらに、血縁を超えて次世代への責任を果たせる存在として成長する必要があると両作品に繰り返し語られている。

キーワード：地震、暴力、原発、家族、次世代

台灣日語教育學報第三十一期

村上春樹文学における地震
―『神の子どもたちはみな踊る』から『騎士団長殺し』へ―

葉麦
淡江大学日本語文学科助理教授

1.はじめに

地震に関連する村上春樹の作品と言えば、1995 年 1 月に起きた阪神淡路大震災をモチーフとする『神の子どもたちはみな踊る』(2000 年・新潮社）が挙げられる。周知のように、同年 3 月に日本社会を深く震撼させた地下鉄サリン事件について、村上春樹が『アンダーグラウンド』(1997 年・講談社）と『約束された場所で』(1998 年・文藝春秋）という二冊のノンフィクションを上梓した翌年、阪神淡路大震災について「連作『地震のあとで』」というタイトルで、『新潮』(1999 年 8 月号～12 月号）に五つの短編（「UFO が釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」）は連載された。連載小説という形で阪神淡路大震災を記録する理由について、村上春樹は以下のように述べている[1]。

> 僕は神戸の地震についてノンフィクションを書きたいという気持ちには、どうしてもなれなかった。そこは僕が少年時代を送った思い出の深い場所であるし、たくさんの知り合いもいる。（中略）その地震がもたらしたものを、できるだけ象徴的なかたちで描くことにしよう。その出来事の本質を様々な「べつのもの」に託して語る。

阪神淡路大震災をノンフィクションとして記録できないのは、神

[1] 村上春樹（2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③　短篇集Ⅱ』講談社 P.271

台灣日語教育學報第三十一号

戸が村上春樹の少年時代の思い出の深い場所だからである。結果として、阪神淡路大震災への思いは「象徴的なかたち」で描かれた『神の子どもたちはみな踊る』という短編小説集[2]に集約されている。収録された六つの短編のいずれも阪神淡路大震災の 1 ヶ月後である「1995 年 2 月」に起きた出来事と設定されている。地震という自然災害の後で日本中に漂っていた不穏な空気について、村上春樹は紀行集『辺境・近境』(1998 年・新潮社) で以下のように述べている[3]。

> その平和な風景の中には、暴力の残響のようなものが否定しがたくある。僕にはそのように感じられる。その暴力性の一部は僕らの足下に潜んでいるし、べつの一部は僕ら自身の内側に潜んでいる。ひとつは、もうひとつのメタファーでもある。あるいはそれらは互いに交換可能なものである。

地下に潜む地震の暴力性と人間の内側に存在する暴力性は「交換可能なもの」として繋がっているということである。要するに、自然の力である地震と人間の内面が「暴力性」とい面において繋がっているのである。1995 年 2 月という時間設定は、「暴力性」が 1 月の阪神淡路大震災から 3 月の地下鉄サリン事件へ移行するという発想からのものではないか。

そして、村上春樹は阪神淡路大震災を地下鉄サリン事件と連結させて、両事件の共通点として「そのような執拗なまでの『地下性』は、僕にはただの偶然の一致とは思えなかった[4]」と説明し、自然の災害であれ、人為的な事件であれ、目に見えない「地下」に潜む力がもたらす被害にどう対処するか、『神の子どもたちはみな踊る』を通して、彼自身を含め、問いかけをし続けている。『辺境・近境』で

---

[2] 『新潮』に連載された五つの短編に、書き下ろしの「蜂蜜パイ」が加わっている。
[3] 村上春樹 (1998)『辺境・近境』新潮社 P.230
[4] 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③　短篇集Ⅱ』講談社 P.270

台灣日語教育學報第三十一期

村上春樹が言う「暴力性」は、決して自然災害による人間社会の破壊ではなくて、自然災害の阪神淡路大震災と人為事件の地下鉄サリン事件との共通項として、目に見えないところに潜む力の象徴の一つなのである。

一方、最新（2018 年 8 月現在）長編小説である『騎士団長殺し』（2017 年・新潮社）において、東日本大震災を連想される場面があり、地下に潜む暴力性を有する地震という要素は再び取り上げられた。『神の子どもたちはみな踊る』に地震をテーマにするのは、村上春樹が故郷の神戸に対する思いを込めて、地震がもたらしたものを「象徴的なかたち」で表現しようとしているからであるが、『騎士団長殺し』に東日本大震災を取り上げた理由は何であろうか。

東日本大震災及び福島の原発事故が起きて以降、多くの日本人作家が地震や原発をテーマにする小説或いはエッセイを発表している。村上春樹もその一人である。彼はカタルーニャ賞の受賞スピーチ（2011 年）で、日本の原発や原子力利用について否定的に述べている[5]。しかし、初めて作品に東日本大震災や原発問題を取り入れたのは、6 年も経った『騎士団長殺し』である。その理由は、『騎士団長殺し』の創作経緯についてのインタビュー集『みみずくは黄昏に飛びたつ』（2017 年・新潮社）での村上春樹の発言から窺える[6]。

> バブルの崩壊があって、それから神戸の地震があって、3・11 があって、原発の問題があった。それらの試練を通して、僕は、日本がもっと洗練された国家になって行くんだろうと思っていたわけ。でも今は明らかにそれとは正反対の方向に行ってしまっている。

[5] 村上春樹（2015）『村上さんのところ』新潮社 P.158-159 で、読者からの「カタルーニャ賞受賞スピーチでは日本の原発依存システムと核を否定されたりしましたよね」というコメントに対して、村上春樹は「何かを主張すれば、必ず誰かが面白くない思いをします」と答えている。

[6] 川上未映子訊く／村上春樹語る（2017）『みみずくは黄昏に飛びたつ』新潮社 P.62

台灣日語教育學報第三十一期

村上春樹は、バブルの崩壊、神戸の地震、3・11、原発の問題を日本が受けた試練と看做している。そして、そういった試練を受けて洗練された国になるはずの日本は、予想と正反対の方向に向かいつつあると言われている。このように、村上春樹はバブル崩壊、阪神淡路大震災、東日本大震災、福島原子力発電所事故を並べて、それらが日本を新たなステップに導ける試練と位置付けていることが分かる。

1995 年の阪神淡路大震災で自然の力による人間社会の破壊を経験した日本は、それ経験が 2011 年に起きた東日本大震災で繰り返された。上記の引用文から分かるように、村上春樹から見ると、既に阪神淡路大震災を経験した日本政府の東日本大震災への対応はまだ十分なものとは言えない。そして、地震の津波に招かれた福島原子力発電所事故があるように、自然災害と人為的な事故と結びつく点において、東日本大震災は、阪神淡路大震災にどこか響き合っている。

こうして、再び「地震」という要素が持ち込まれた『騎士団長殺し』において、東日本大震災はどういう存在であろうか。それを通して村上春樹は何かを訴えているのではないか。そして、前述したように、『神の子どもたちはみな踊る』を通して、目に見えない地下に潜む暴力への対処が問いかけられている。同じく地震が取り入れられた『騎士団長殺し』において、地震と暴力性との関連性はどのように描かれているか。両作品の関連性は認められるのであろうか。本稿では、『神の子どもたちはみな踊る』と『騎士団長殺し』を対象にして、村上春樹における地震の表象を究めようと思う。

2.『神の子どもたちはみな踊る』における阪神淡路大震災

『神の子どもたちはみな踊る』に収録される六編の短編はいずれも阪神淡路大震災を描く物語ではない。物語の舞台も被災地から離れた場所である。なぜ阪神淡路大震災をテーマにする一方、作品の舞台を村上春樹の故郷である神戸にしないかというと、松本常彦は

台灣日語教育學報第三十一期

次のように論じている。

「地震」と「家族」とが「どっかでつながっている」ことを支持するであろう。連作全体を見渡しても、「家族」の問題は、くりかえし問われており、それは「神戸を舞台にはしないし、地震も直接には描かない」で「神戸の地震」を「大きなテーマ」とする場合のテーマや書き方とも関係している。[7]

松本氏の論説によると、『神の子どもたちはみな踊る』を通して村上春樹が描こうとするのは「家族」という「大きなテーマ」ということである。指摘の通り、「家族」に関して2000年代以降の村上春樹文学における重要なテーマの一つだと思われる。しかし、村上春樹文学における家族を論及するに当たって、故郷である「神戸」という要素は無視されない。しかも、直接物語の舞台にしなくても、神戸に対する言及は作中に散見されている。こうして、地震と作品との関係性を解明するため、本節では、各編における舞台、阪神淡路大震災の関連箇所、神戸との関わりを整理する。

まず、第一編の「UFOが釧路に降りる」では、秋葉原にある老舗のオーディオ機械専門店に勤める主人公の小村は、妻に離婚の話を持たされた後、旅行として釧路に行く。「妻は山形の出身で、小村の知る限りでは、神戸近郊には親戚も知り合いも一人もいなかった」（P.10）と書いてあるように、主人公の身の周りに被災地と直接関係のある人物はいない。そして、「UFOが釧路に降りる」における阪神淡路大震災への言及は下記の箇所が挙げられる。

例① 五日のあいだ彼女は、全ての時間をテレビの前で過ごした。銀行や病院のビルが崩れ、商店街が炎に焼かれ、鉄道や高速道路が切断された風景を、ただ黙ってにらんでい

[7] 松本常彦（2008）「地震のあとで――彼女は何をみていたのか――」『九大日文』第12巻P.113

台灣日語教育學報第三十一號

た。(P.10、下線は筆者によるもの・以下同)

例② 新聞は相変わらず地震の記事で埋まっていた。(中略) 死亡者数はまだに増え続けていた。水と電気は多くの地域でとまったままで、人々は住む家を失っていた。悲惨な事実が次々に明らかになっていた。(P.18)

例③ ニュースの地震特集だった。いつもながらの映像が繰り返されていた。傾いたビル、崩れた道路、涙を流す老女、混乱とやり場のない怒り。(P.29)

例④ 小村の頭の中にあったのは地震の光景だった。それがスライドの映写会みたいに、ひとつ浮かんでは、ひとつ消えていく。ひとつ浮かんでは、ひとつ消えていく。高速道路、炎、煙、瓦礫の山、道路のひび。(P.33-34)

例①～③から分かるように、「UFO が釧路に降りる」に語られる地震の光景は、登場人物がテレビニュースや新聞記事に見るものである。そして、例④は登場人物の記憶にある地震の光景である。語りが三人称なので、地震の光景をリアルに描くという手法もあるが、「UFO が釧路に降りる」被災地の様子は登場人物が見た情報を通して「二次情報」という形として語られている。

そして、収録される第二編の「アイロンのある風景」において、登場人物の順子、啓介、三宅は茨城県鹿島灘の小さな町に住んでいる。三人が流木で焚き火をする途中、下記のように阪神淡路大震災の話題は持ち出される。

例⑤ 「三宅さん、出身は神戸のほうだっていつか言ってましたよね」、啓介がふと思い出したように明るい声で尋ねた。「先月の地震は大丈夫だったんですか？　神戸には家族とかいなかったんですか？」(P.47)

例⑥ 「子どももいるの？」(と順子が聞く・論者注)
「ああ、いる。二人もいる」(と三宅が言う・論者注)

台灣日語教育學報第三十一期

「神戸にいるんだね」

「あそこに家があるからな。たぶんまだそこに住んどるやろな」

「神戸のなんていうところ？」

「東灘区」（P.58）

例⑤、例⑥のように、「アイロンのある風景」において、神戸出身の三宅は登場している。しかし、阪神淡路大震災は三宅との話題として持ち出されるだけで、地震の光景は描かれていない。三人の会話で阪神淡路大震災は触れられるが、焦点は三宅の出身に置かれている。

また、第三編の「神の子どもたちはみな踊る」では、母親と東京に住んでいる主人公の善也は、東京神谷町の駅の近くの出版社に勤める。阪神淡路大震災に関する語りは下記の通りである。

例⑦　母親は三日前、他の信者さんたちと関西に出かけた。まったく人さまざまだな、と彼は思う。母親は神様のお使いのボランティアで、息子は超重量級の二日酔いときた。（P.69）

例⑧　夕刊の社会面は相変わらず地震関連の記事で埋まっていた。 母親と他の信者さんたちは、大阪にある教団の施設に泊まりこんでいるはずだ。彼らは毎朝リュックに生活物質を詰め込み、電車で行けるところまで行き、あとは瓦礫に埋もれた国道を神戸まで歩いた。そして人々に生活必需品を配った。リュックの重さは15キロにもなると母親は電話で言っていた。（P.81）

上記例文から分かるように、善也の母親はボランティア活動をするため被災地の神戸あたりに行っているが、語り手の視点は東京にいる善也に置かれている。阪神淡路大震災に対する言及は夕刊の新

台灣日語教育學報第三十一號

聞記事と母親からの情報によるものであり、いずれも二次情報という手法で現れている。

続いて、第四編の「タイランド」は、バンコックへの飛行機の中から始まる。主人公のさつきはバンコック・マリオットの会議場で開催される世界甲状腺会議に出席したあと、タイ人のニミットの案内でタイに一週間ほど滞在する。地震に関する箇所は下記の通りである。

例⑨　神戸にはあの男が住んでいる。（中略）その男が神戸に住んでいることを彼女は知っていた。自宅の住所も電話番号も知っていた。彼女がその男の足どりを見失ったことは一度もなかった。地震のすぐあとでさつきは彼の自宅に電話をかけて見たが、もちろん電話は繋がらなかった。（P.107-110）

例⑩　先月の神戸の大地震ではたくさんの人がなくなりました。ニュースで見ました。（P.107）

作品の舞台は飛行機移動以外、全部タイにある。京都出身のさつきが「十八までしか住んでいなかったし、それ以来ほとんど戻っていない」（P.106）と語られるように、故郷を離れたと言うものの被災地出身の人物が登場している。また、例⑨のように、安否不明な、さつきの知り合いとして「あの男」は神戸に住んでいる。そして、例⑩のように、阪神淡路大震災は話題として言及されるだけで、震災の光景は描かれていない。

それから、第五編の「かえるくん、東京を救う」は、主人公の片桐の前に「かえるくん」という人間の言葉を話せる巨大な蛙が姿を現して、他の五編と比べて非現実的な作品である。阪神淡路大震災に関する箇所は次の通りである。

例⑪　彼は先月の神戸の地震によって、心地の良い深い眠りを

台灣日語教育學報第三十一號

唐突に破られたのです。そのことで彼は深い怒りに示唆された一つの啓示を得ました。そして、よし、それなら自分もこの東京の街で大きな地震をひき起こしてやろうと決心したのです。(P.137)

例⑫ それは先月の神戸の大地震よりも更に大きなものになるでしょう。その地震による死者はおおよそ15万人と想定されます。多くはラッシュアワー時の交通機関の脱線転覆衝突事故によるものです。高速道路の崩壊、地下鉄の崩落、高架電車の転落、タンクローリーの爆発。ビルが瓦礫の山になり、人々を押しつぶします。いたるところに火の手が上がります。人々はただ空しく死んでいくだけです。死者15万人ですよ。まさに地獄です。(P.133-134)

例⑪は、阪神淡路大震災に怒った「みみずくん」が東京で大きな地震を起こそうとすることを、「かえるくん」は片桐に言う場面である。阪神淡路大震災は「東京の地震」の契機だと説明される。そして、例⑫は、「みみずくん」が起こそうとする「東京の地震」による被害に対する描写である。「かえるくん、東京を救う」において、阪神淡路大震災は「東京の地震」の契機として言及されている。

最後に、第六編の「蜂蜜パイ」において、兵庫県出身の淳平、浅草出身の小夜子、そして小夜子の娘・沙羅は主要な登場人物である。作品の舞台は小夜子の高円寺のマンションと上野動物園が中心である。そして、阪神淡路大震災に対する描写は下記の通りである。

例⑬ 地震が起こったとき、淳平はスペインにいた。航空会社の機内誌のためにバルセロナの取材をしていたのだ。夕方ホテルに戻ってテレビのニュースをつけると、崩壊した市街地と立ちのぼる黒煙が映し出されていた。まるで爆撃のあとのようだ。アナウンスはスペイン語だったから、どこの都市なのかしばらく淳平にはわからなかった。し

台灣日語教育學報第三十一号

かしどうみても神戸だ。見覚えのある風景がいくつも目についた。芦屋のあたりで高速道路が崩れ落ちていた。（P.189）

上記の引用文から分かるように、被災地の光景は淳平がテレビのニュースに見たもので、神戸のリアルな様子に対する語りではない。ニュースはスペイン語のアナウンスだが、「兵庫県の西宮市に生まれ（中略）神戸の私立進学校から早稲田大学に進んだ」（P.167）淳平はすぐ神戸の風景が認識できる。

以上『神の子どもたちはみな踊る』から見出された阪神淡路大震災に関連する箇所を、「作品の舞台」、「神戸出身の人物」、「地震の光景」に分けて表１にまとめた。

表１　『神の子どもたちはみな踊る』における阪神淡路大震災の関連箇所

作品名	作品の舞台	神戸出身の人物	地震の光景
「UFOが釧路に降りる」	東京、釧路	×	○
「アイロンのある風景」	茨城県鹿島灘	○	×
「神の子どもたちみな踊る」	東京	×	○
「タイランド」	バンコック	○	×
「かえるくん、東京を救う」	東京	×	×
「蜂蜜パイ」	東京	○	○

○：該当あり　×：該当なし

表１の「作品の舞台」から分かるように、登場人物の日常生活空間は阪神淡路大震災から離れたところにある。それにもかかわらず、小村、順子、善也、さつき、片桐、淳平の人生にある程度の影響を与える。そして、「神戸出身の人物」によって、該当する登場人物の

台灣日語教育學報第三十一号

いない奇数三編「UFO が釧路に降りる」、「神の子どもたちはみな踊る」、「かえるくん、東京を救う」と、神戸出身の人物が登場する偶数三編「アイロンのある風景」、「タイランド」、「蜂蜜パイ」と、二つの系列に分けられる。

そして、「地震の光景」から、阪神淡路大震災を語るのを避ける傾向が見られる。地震の光景を語らず、ただ話題として阪神淡路大震災を言及する作品は三編ある。被災地の様子を描くにあたって、直接にリアルな様子を語るのではなくて、登場人物が見たニュースや新聞記事という「二次情報」という形で間接的に表現されている。こうして、『神の子どもたちはみな踊る』は、実際に起きた阪神淡路大震災を語るものというより、「地震」という破壊的な力が人間にもたらす心的な影響を描く作品だと言えよう。

3.『神の子どもたちはみな踊る』における地震と人間

本節では、被災地の神戸出身の登場人物がいるかと基準にし偶数三編と奇数三編という二作群に分けて、地震が人間に与える影響を見てみよう。

3.1 被災地出身人物と地震との間

第二編の「アイロンのある風景」で、家族がまだ神戸に住んでいるだろうという話をした後、三宅は以下のように自分がいつも見ている夢の内容を言う。

> 狭いところで、真っ暗な中で、ちょっとずつちょっとずつ死んでいくんや。それもうまいことすっと窒息できたらええけどな、そう簡単にはいかん。(中略) 死ぬまでにものすごい長い時間がかかる。声を上げても誰にも聞こえへん。誰も俺のことに気づいてもくれん。身動きもできんくらい狭いところや。どんなにあがいても内側からドアは開かへん。(P.59)

台灣日語教育學報第三十一期

それは三宅がずっと昔からいつも見ている夢であるが、阪神淡路大震災を話題にするまで、彼は一度も順子に言ったことがない。三宅が夢で見た、狭くて真っ暗な空間で誰にも気づかれずに死んでいくのは、地震の被災者が崩壊した建物に埋まってしまったことを想起させる。死に関連する三宅の夢は地震の暴力性に繋がっているといえよう。それは、第三編の「タイランド」で、「あの男が重くて固い何かの下敷きになって、ぺしゃんこにつぶれていればいいのにと彼女は思った。あるいはどろどろに液体化した大地の中に飲み込まれていればいいのに」（pp.107-108）と、「あの男」が何かに押しつぶされて死んでほしいさつきの願望に呼応している。他人の死を願うさつき内面の暴力性が地震の暴力性に投影されているのではなかろうか。

そして、第六編の「蜂蜜パイ」にも類似した場面がある。それは「神戸の地震のニュースを見すぎた」（P.166）沙羅が次のような夢を見たと小夜子は言う箇所である。

> 沙羅は、知らないおじさんが自分のことを起こしに来るんだっていうの。それは地震男なの。その男が沙羅を起こしに来て、小さな箱の中に入れようとするの。とても人が入れるような大きさの箱じゃないんだけど。それで沙羅が入りたくないというと、手を引っ張って、ぽきぽきと関節を折るみたいにして、むりに押し込めようとする。そこで沙羅は悲鳴を上げて目を覚ますの。（P.166）

三宅の夢と同じように、狭いところに閉じ込められるのは地震の被害が思い出されるのである。「ぽきぽきと関節を折るみたいにして、むりに押し込めようとする」という箇所はさらに地震の暴力的な部分が訴えられているのではないか。

上記の引用文をまとめてみると、人間内面に存在する暴力性は、他人の死を求めるさつきのような、自分が認識しているのもあれば、

台灣日語教育學報第三十一期

三宅や沙羅のように夢でしか表れない、無意識の領域に存在しているのもある。冷蔵庫に閉じられて死んでいくという三宅の夢、「あの男」の圧死というさつきの願望、沙羅が見る、人を殺そうとする地震男の夢、そのいずれも地震を話題にしたあと語られるものである。こうして、破壊的な力を有する地震が登場人物内面に死に関連する暴力的な側面を引き出すように、地震は人間の深層心理に影響を及ぼしていると考えられる。

3.2 非被災地出身人物と地震との間

第一編の「UFO が釧路に降りる」では、小村の妻は「朝から晩までテレビの前を離れ」(P.10) ずに、五日間地震関連の番組を見ているばかりである。五日後、彼女は「あなたの中に私に与えるべきものが何ひとつない（中略）あなたとの生活は、空気のかたまりと一緒に暮らしているみたいでした」(P.13) と書いてある手紙を残して、家から姿を消す。妻と離れた小村は結果的に行ったことのない釧路という「新しい場所」に行って、佐々木ケイコ、シマオとの「新しい出会い」が生み出される。短編の最後にある「でも、まだ始まったばかりなのよ」(P.37)というシマオの台詞が暗示しているように、元の家庭が崩壊した小村には新しい可能性が始まるのである。

第三編の「神の子どもたちはみな踊る」において、震災のボランティアで母親が家を離れて関西に出かけたことによって、善也は母親のいる日常生活を離れる。それは、「結局、25 歳の今にいたるまで、家を出ることはできなかった。一人で放っておいたら、母親が何をしでかすかわかったものではないというのも、理由のひとつである」(P.72) という「母親からの無形な束縛」から善也が解放されることと看做されよう。こういう状況で、善也は「自分の生物学的な父親」(P.80) と思われる人物を地下鉄で目撃し、彼を尾行することになる。最後、善也は「僕が追い回していたのはたぶん、僕自身が抱えている暗闇の尻尾のようなものだったんだ。僕はたまたまそれを目にして、追跡し、すがりつ」(P.89) くと認識する。こうして、

台灣日語教育學報第三十一号

「自分の身体の中にある自然な律動が、世界の基本的な律動と連帯し呼応している」（P.90-91）と思う善也は、自分の身体の中に存在する律動と地球の律動との連帯や呼応を実感している。地震が自分の一部として人間の身体の中に存在していることを考える善也は、地下に潜むエネルギーとしての地震に響き合うように、心の深層に抱える「暗闇」を直視することになる。

「かえるくん、東京を救う」では、地震を起こそうとする「みみずくん」との闘いについて、「闘うのはぜんぜん好きじゃありません。でもやらなくてはならないことだからやるんです。きっとすさまじい闘いになるでしょう。生きては帰れないかもしれません。身体の一部を失ってしまうかもしれません」（P.140）と「かえるくん」は言う。地震が起きる地下に潜むエネルギーを暗示する「みみずくん」に向き合う決心は見られる。しかし、「彼（みみずくん・論者注）のことを悪の権化だとみなしているわけでもありません」（P.137）とあるように、地震になる可能性のある、地下に潜むエネルギーは決して簡単に悪と見做すものではない。また、地下にいる「みみずくん」と闘うかえるくんが片桐の「勇気と正義」（P.140）を必要とする。まとめて言うと、人間社会を壊滅させる地震のエネルギーは必ずしも悪とは限らず自然の一部に過ぎない。人間の心に秘められる力もそのようなものであろう。人間が自分の内面に潜む、必ずしも「悪」ではない「暗闇」と対面するのは、「勇気と正義」がなければ決して簡単にできるものではない。しかし、それは人間が生きている以上やらなくてはならないことなのである。

以上三編を整理して言えば、地震は登場人物の日常生活に直接な被害をするものではないが、何らかの形で人生に影響を与える。地震は小村を新しい出会いに導いたり、善也を心の深層に存在する「暗闇」に向き合わせたりするきっかけである。そして、人間が生きていくために自分の「暗闇」に向き合うことの重要性は、「かえるくん、東京を救う」で提示されている。未来への新しい可能性を手に入れるために心に潜む「暗闇」に向き合う勇気は実は人間が既に有して

台灣日語教育學報第三十一号

いる。地震は人間の心を動かし勇気を引き出す契機である。こうして、地震は人間内面におけるプラス的な力に繋がっていると考えられる。

3.3 地震と人間と繋がり

上述したように、地震は死を連想される人間内面の暴力性を引き出す一方、心の「暗闇」に向き合う力にもなる。『神の子どもたちはみな踊る』は阪神淡路大震災を借用して、人間内面のあり様を描く作品だと考えられる。阪神淡路大震災をテーマにする一方、震災の様子を直接描かないことについて、黒古一夫は以下のように述べている。

> その被害や被害者そのものへ正面から向き合ってそこに生じている問題を表現化することなく、その被害や被害者でもない人々の心的影響を取り上げるという「ズレ」の方法で地震がもたらした「暴力」を問題にしたのである。[8]

確かに『神の子どもたちはみな踊る』に震災及び被災地をめぐる社会問題が触れられていない。それは『神の子どもたちはみな踊る』が地震を通して人間内面を描く作品だからである。人間内面に存在した矛盾や葛藤などの感情は地震によって表されるのは、地震という地下に潜むエネルギーが人間の心の深層に秘める力に繋がるからである。このように、阪神淡路大震災を対象にして、地震という地下に潜むエネルギーが人間にもたらした影響はは作品の中心部分だと言えよう。

自分の身体の中にある律動と世界の基本的な律動と連帯し呼応する実感をした善也や、自然と人間との繋がりを示唆する台詞「どっかでつながっている」をいうシマオがいるように、『神の子どもたち

[8] 黒古一夫（2007）『村上春樹　「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版 P.231

台灣日語教育學報第三十一号

はみな踊る』で村上春樹は人間が自然の一部として両者が繋がっていると説いている。被災地出身の人物が登場する三編において、死に関わる人間内面の暴力性を引き出す地震は、そのは破壊的な力が人間の手が及ばないものであり、その暴力性が往々にして死に繋がる悪の力だと思われる。しかし、被災地出身の人物が登場しない三編に提示されるように、地震は人間を心の「暗闇」に向き合わせるきっかけとしての力だとでも看做される。地震が人間の心に備わる力に共通するのは、他人を不幸にする暴力になる可能性もある一方、「暗闇」に向き合う勇気になる可能性もあるという両面性である。『神の子どもたちはみな踊る』は、如何にして心の深層に秘められる力をコントロールし新しい未来を歩むかという人間に課せられる課題を描く作品だと言えよう。

4.『騎士団長殺し』における東日本大震災

前節では、阪神淡路大震災を対象にした『神の子どもたちはみな踊る』における「地震」という要素がもたらす影響について考察した。本節では、『騎士団長殺し』における東日本大震災への語りを分析する。

作品の冒頭に「その年の五月から翌年の初めにかけて、私は狭い谷間の入り口近くの山の上に住んでいた」(第 1 部　P.13) とあるように、『騎士団長殺し』は語り手の「私」が過去の出来事を回想するという形式の物語である。しかし、物語の主軸である「その年の五月から翌年の初めにかけて」の出来事に対する語りが一段落ついたら、作品の最終章で唐突に下記のような後日談に変わる。

> 私が妻のもとに戻り、再び生活を共にするようになってから数年後、三月十一日に東日本一帯に大きな地震が起こった。私はテレビの前に座り、岩手県から宮城県にかけての海外沿いの町が次々に壊滅して行く様子を目にしていた。(第 2 部　P.529)

台灣日語教育學報第三十一期

「東日本大震災」という固有名詞が使われていなくても、「三月十一日」、「岩手県から宮城県にかけて」などのキーワードから、これは東日本大震災の様子を語る箇所だと分かる。そして、「私」が東日本大震災に関心を払う理由について、「そこは私がかつて古いプジョー205に乗って、あてもなく旅をしてまわった地域だった」（第2部 P.529）と書かれている。「その年」の五月に山の上に住むようになる前、「一ヶ月半以上」（第1部　P.51）東北・北海道の旅を続く。その旅について「私」は次のように説明する。

> それらの地域を旅してまわっていたとき、私は決して幸福ではなかった。どこまでも孤独で、切ない割り切れない思いを身のうちに抱えていた。（中略）そしてそれはそのとき私が考えていたよりは、ずっと大事な意味を持つことだったのかもしれない。（第2部　P.530）

「その年」の「三月半ばの日曜日の午後」（第1部　P.28）、急に妻に別れの話を持ち出される「私」は一ヶ月半ぐらい孤独の旅を始める。「私」が言う「大事な意味」は、作品の最終章で言及される、東北の旅に出会う「白いスバル・フォレスターの男」、「不思議な一夜を共にした痩せた女」以外、「東北の町から町へと一人で移動しているあいだに、夢をつたって、眠っているユズと交わったのだ。私は彼女の夢の中に忍び込み、その結果彼女は受胎し、九ヶ月と少し後に出産したのだ」（第2部　P.539）という出来事だと考えられる。

不思議な受胎で生まれたのは「私」の娘・「むろ」である。「私は保育園に子供を迎えに行った」（第2部　P.531）と語られるように、保育園に通うむろの年齢は明記されていない。それだけではなくて、物語の主題である「その年」は年代も明白に記されていない。「その年」に起こる出来事について、「翌日は月曜日だった。目が覚めたとき、ディジタル時計は6:35を表示していた」（第1部　P.356）とあるように、曜日、時刻まで語ることに対して、「その年」の年代だけ

台灣日語教育學報第三十一号

は語られていない。それは如何なる不自然な語り方だと察せられよう。唯一年代が判明できるのは、2011 年に起きた東日本大震災なのである。そして、「その年」が特定できる手がかりは、秋川まりえという登場人物に対する言及である。作品の最終章で、以下のようにまりえの年齢は触れられる。

> 東北の地震の二ヶ月後に、私がかつて住んでいた小田原の家が火事で焼け落ちた。(中略) 彼女はそのときもう高校の二年生かそれくらいになっていた。(第 2 部　P.533-536)

東北の地震の二ヶ月後、つまり「2011 年 5 月」に高校二年生になるまりえは、「その年」に「秋川まりえは小柄で無口な十三歳の少女だった。(中略)中学生である彼女は最年長だった」(第 1 部　P.413) と語られている。逆算すれば、彼女が「13 歳・中学一年生」の一年間は、2007 年 4 月～2008 年 3 月の間だと推定されよう。そして、「私」がまりえに会うのは、「その年の五月」に小田原の家に住むようになってからのことである。したがって、「その年」は「2007 年」だと考えられる。

以上のように、作品の最後で東日本大震災に対する言及は、作中に散見する東北の旅に呼応するほか、物語の年代を特定する働きも看做される。「私」の語りの特徴の一つとして、時間に対して細かくまで記録するところである。それにもかかわらず、「その年」と語るのは、意図的に物語の発生年代を曖昧にするのではなかろうか。こうして、東日本大震災に対する言及は、作品の最終章で「私」が一ヶ月半の東北・北海道の旅を前景にする一方、物語の主軸である「その年」の年代を「2007 年」と判断する基準になっている。

5. 地震後における人間の生き方

本節では『騎士団長殺し』における地震を分析したうえ、『神の子どもたちはみな踊る』と共通的に表した地震と人間との総合関係を

台灣日語教育學報第三十一号

考察する。

5.1『騎士団長殺し』における地震のあと

前節で考察した通り、東日本大震災は物語の年代や登場人物の年齢を推定する手がかりだと分かる。本節では、むろの年齢に対する推考をしたうえ、『騎士団長殺し』における地震のあとを分析してみる。

「私」の妻・ユズの妊娠について、「彼女は妊娠七ヶ月くらいになっている。今から七ヶ月前というと、だいたい四月の後半になる。（中略）四月後半といえば、北海道から青森に渡った頃だ」（第 2 部 P.187）とあるように、むろは受胎が「2007 年 4 月後半」で、生まれたのが「九ヶ月と少し後」の「2008 年 2 月」だと推定されよう。こうして、東日本大震災発生の 2011 年 3 月に保育園に通うむろは、3 歳前後だと特定されよう。

東日本大震災が起きた後、「何をすることもできず、言葉を失ったまま、私はテレビの画面を何日もただ眺めていた」(第 2 部　P.529) と語る「私」が見る地震は下記のような光景である。

> 幹線道路はずたずたに寸断されていたし、町や村は孤立していた。電気もガスも水道も、ライフラインは根こそぎ破壊、失われてしまっていた。そして南側の福島県では（私が死んだプジョーを残してきたあたりだ・原文のまま）、海岸沿いのいくつかの原子力発電所がメルトダウン状態に陥っていた。（第 2 部 P.530）

東北の旅に「大事な意味」を持つ「私」が地震の光景を見て感じる衝撃は言うまでもない。ライフラインが破壊され人間の住める地域となくなったというよくある地震後の様子だけではなくて、津波による原子力発電所まで壊滅的な打撃を受けた光景も映される。こういった光景はむろの目にすると、「私」の反応は下記のようなもの

台灣日語教育學報第三十一期

である。

むろは家に帰ると、私と一緒にテレビのニュースを見た。私は津波の押し寄せてくる光景を彼女にできるだけ見せないようにした。幼い子供にはあまりに刺激が強すぎるからだ。津波の映像が映ると、私はすぐに手を伸ばして娘の両目を塞いだ。(中略)「きみは見ない方がいい。まだ早すぎる」(と私がむろに言う・筆者注)(第2部　P.532)

3歳のむろに津波が押し寄せてくる光景を見せないため、「私」は手で彼女の両目を塞ぐまでする。それは現実問題を目にさせないという現実回避の行為だと解釈しても差し支えないが、それは「私」がはっきりした原因を持つ結果である。その原因として「私」は次のように語る。

彼女には津波や地震というような出来事も理解できなかったし、死というものの持つ意味も理解できなかった。でもとにかく私は彼女の目を手でしっかりと塞いで、津波の映像を見せないようにした。何かを理解することと、何かを見ることとは、またべつのことなのだ。(第2部　P.532)

以上の引用文から、津波や地震は3歳のむろに理解不能な出来事であり、地震を理解させようとするに津波の光景を映すニュースを見せるのは何の役にも立たないという「私」の考えが窺える。要するに、ニュースから分かるのはただ地震がもたらした物理的な被害だけである。それは地震の暴力性が有する可能性を正確に理解できるわけではない。こうして、ニュースに映る地震の光景はただ地震による物理的な破壊にすぎず、地震そのものを理解することに無用なものだと考えられる。以上から分かるように、「私」がむろにニュースを見せないのは、決して現実問題から逃避するのではない。逆

台灣日語教育學報第三十一号

に、むろに地震が人間に対する影響の本質を理解させようとする姿勢が窺える。

そして、「私」はむろとの親子関係について下記のように語る一節がある。

> むろが誰の子供なのか、私にはまだわからない。正式に DNA を調べればわかることなのだろうが、私はそのような検査の結果を知りたいとは思わなかった。(中略) むろは法的には正式に私の子供だったし、私はその小さな娘をとても深く愛していた。(第 2 部　P.539)

戸籍上むろの父親は「私」とされているが、むろ受胎の 2007 年四月に「私」は東北の旅をするところである。ユズの夢に忍び込んで受胎させると解釈する「私」は、「彼女の生物学的な父親がたとえ誰であっても、誰でなくても、私にはどうでもいいことだった」(第 2 部　P.539) と語るように、自分がむろの「生物学的」な父親であることが低いと認識する。

また、『騎士団長殺し』において、「四十歳になるまでに、なんとか画家として自分固有の作品世界を確保しなくてはならない」(第 1 部　P.76) と語る「私」は、東日本大震災のあと自分の絵画について下記のように説明する。

> 地震のニュースを見るかたわら、私は日々生活のために「営業用」の肖像画を書き続けた。何を考えることもなく、キャンバスに向かって半ば自動的に手を動かし続けた。それが私の求めていた生活だった。(中略) それもまた私の必要としているものだった。私には養うべき家族がいるのだ。(第 2 部　P.533)

40 歳になるまでに自分の絵画のスタイルを確立しようとする「私」は、結局地震が起きた 2011 年に肖像画を描いて生計を立てるまま

台灣日語教育學報第三十一期

である。「私はそのとき 36 歳になっていた」（第 1 部　P.27）と語られるように、2007 年に 36 歳だった「私」は、2011 年の時点で 40 歳だと思われる。一見して、地震のあとも「営業用」の肖像画を描き続ける「私」は何の成長もなく、物語の最初と何の変わりもない。しかし、「私」のむろへの対応から分かるように、「私」はむろに責任を感じる。「私」は地震を体験していない世代へ繋ぐ存在として成長をなり遂げる。

5.2『神の子どもたちはみな踊る』における地震のあと

『神の子どもたちはみな踊る』に収録される「蜂蜜パイ」においては、主人公の淳平は「なるべくニュースは見ないことだね（中略）テレビそのものもしばらくはつけない方がいい。今はどこのチャンネルでも地震の映像が出てくるから」（P.167）と言って、「4 歳の女の子」（P.166）である沙羅に地震の映像を見せないほうがいいと沙羅の母・小夜子にアドバイスをする場面がある。その理由は、沙羅が「地震男」の暴力的な夢を見るのが「神戸の地震のニュースを見すぎたせい」（P.166）だと淳平が思うからである。

「蜂蜜パイ」における「神戸の地震のニュース」は「崩壊した市街地と立ちのぼる黒煙が映し出されていた。まるで爆撃のあとのようだ」（P.189）と語られている。そういった光景が 4 歳の沙羅に理解不能なものだとしても、彼女の心に受けた衝撃は無意識に溜まる。結果として、無意識の領域に保存される衝撃は「地震男」という夢で表現される。こうして、阪神淡路大震災による神戸の壊滅的な光景を見る沙羅は地震の意味を理解できず、ただ地震の暴力性を心に飲み込むと考えられる

破壊的な情景に感情が乱されず地震が人間に与える影響への認識を求めるため、むろに地震のニュースを見せない『騎士団長殺し』と同じように、『神の子どもたちはみな踊る』で地震による心の傷が生ずることを阻止しようとするため、沙羅に地震のニュースを見せないのである。むろにニュースに映る津波の光景を見せないのは、

台灣日語教育學報第三十一号

地震を経験していない世代に地震への不正なイメージを生成させないのではないか。両作品の共通点として、二次情報に影響されず地震への理解を求める姿勢だと言えよう。それは、『神の子どもたちはみな踊る』に引き継がれるものだと言っても過言ではない。

そして、「蜂蜜パイ」に「沙羅は高槻を『パパ』と呼び、淳平を『ジュンちゃん』と呼んだ。四人は奇妙な擬似家族を作り上げた」(P.184-185）という箇所があるように、沙羅の「名付け親」(P.182）ある淳平は沙羅の「擬似家族」の一員である。さらに、沙羅の両親が離婚したあと、淳平は彼の大学時代以来の親友である沙羅の実父・高槻の代わりに沙羅親子の面倒を見る。そして、また地震男の夢を見たという沙羅の話を聞いた後、「すぐに結婚を申し込もう。淳平はそう心を決めた。もう迷いはない。これ以上一刻も無駄にはできない」（P.200）とあるように、「擬似家族」を離脱し本当の家族を作る淳平の決心が分かる。「地震がもたらした死の風景が一種の触媒となった[9]」と論じられるように、地震の暴力性は人間に疑似的な死を感じさせてから新生がもたらすものである。こうして、これは古い自分から抜け出して「沙羅親子への責任」を感じる淳平の成長だと考えられる。

5.3 次世代への責任

以上のように、両作に共通するのは、血縁の繋がりによる家族関係より、河合俊雄が「それは西洋における『名付け親』という習慣にも認められる。そのような精神的な親子関係は、生物学的なものにまさる深いつながりを示すことがある」[10]と示唆しているように、親子関係における「精神的」な側面のほうが重要視されている。要するに、生物学的な父親でなくても、「私」、淳平は父親の「代理」を超えて「精神的な父親」として存在するわけである。

---

[9] ジェイ・ルービン著・畔柳和代訳（2006)『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 P.316

[10] 河合俊雄（2017)「『騎士団長殺し』における絵画の鎮魂とリアリティ」『新潮』2017 年 7 月号、新潮社 P.262

台灣日語教育學報第三十一期

家族構成は「生物学的」な血縁の繋がりよりも、「精神的」な部分が重要だと地震という要素を取り入れた両作品に繰り返し提示される。これは震災後、肉親を失われて、自分だけ残されると思う人々へのメッセージとでも読み取れる。『神の子どもたちはみな踊る』に収録された六つの短編において、新しい出会い、新しい付き合い、新しい家族に対する描写が散見される。それは決して過去を捨てるのではなくて、過去の全てを受け入れるからこそ踏み出せる新しい一歩だと考えられる 。それは、新しい世代へ繋がる発端だとも言えよう。『神の子どもたちはみな踊る』、『騎士団長殺し』における地震をめぐる場面を整理してみると、成長した主人公は家族・次世代への責任を体現している。それは恰も地震から生き延びる人々が果たすべき責任でもあるのではないか。

そして、『騎士団長殺し』において、もう一箇所地震は言及される場面がある。それは免色の自分の肖像画に関するコメントである。

> 深い海底で生じる地震のようなものです。目には見えない世界で、日の光の届かない世界で、つまり内なる無意識の領域で大きな変動が起こります。それが地上に伝わって連鎖反応を起こし、結果的に我々の目に見える形をとります。(第１部　P.300)

上記の引用は、「私」に描いてもらう肖像画に自分の本質が見えると感じる免色の台詞である。深い海底で生じる地震に潜む力が地上に伝わる津波にならないと目に見えない存在だと同じように、肖像画という表現手法を通さなければ、無意識の領域に存在する自分の本質は目に見えないものである。ここの「地震」は東日本大震災と関係なく、単に比喩として使われる言葉である。しかし、この比喻における「地震」を東日本大震災と連結しみると、津波による破壊がなければ、原子力発電所の緊急時における対応の不充分は気づかれないものではなかろうか。換言すれば、津波は日本における原子力使用の不完全な対応を露呈させるものである。

台灣日語教育學報第三十一期

以上のように、実際に起きた東日本大震災と免色が使う比喩としての地震という二種類の地震に対する言及の相互関係を考慮しながら分析すると、『騎士団長殺し』における地震の光景は日本のシステムの不備を現したものだと考えられる。津波で破壊されてメルトダウン状態になった原子力発電所を見たら、原子力の使用をマイナス的に思いがちになる。さらに、福島が居住不能な状態になったのは原子力のせいだと、自然に思うようになって、「負の連鎖」に繋がる。しかしながら、原子力発電というのはただ自然に存在する元素を利用する行為であり、必ずしも「負」を生む出す営みとは限らない。原子力の利用において、システムの不備を改善するのは勿論、真の理解による「負の連鎖」の切断も「次世代への責任」なのはないか。

6. おわりに

本稿では、『神の子どもたちはみな踊る』、『騎士団長殺し』を対象にして「地震」という要素を分析した。『神の子どもたちはみな踊る』という作品は、村上春樹が自分の故郷・神戸に壊滅的な打撃を与えた阪神淡路大震災を記録するものというより、地震が人間に自分の内面や過去を省みる契機となるものである。暴力性は地震と人間との共通する要素である。しかし、それは死に繋ぐものだけではなくて、地震は人間に新しい一歩を踏み出す勇気を引き出すものでもある。

そして、『騎士団長殺し』において、東日本大震災が手がかりとして、語り手の「私」やむろの年齢が推定された。2011 年に 40 歳になった「私」は「自分固有の作品世界」を確保しなくても、「娘」のむろに「次世代への責任」を果たせる存在になっている。また、免色が使う地震の比喩と連結して、『騎士団長殺し』における原子力の使用への態度が分かる。「次世代への責任」の一部として、原子力の本質に対する理解が必要とされている。原子力は地震や人間に潜む力と同じような両義性のあるものである。破壊された地域の悲惨さだけ見るのが地震や津波という自然災害への理解に役に立たないと

台灣日語教育學報第三十一期

同じように、原子力の使用を本質的に考えないと村上春樹が言う「洗練」は到底達成されないものであろう。

地震をモチーフにした両作品を比較し分析すると、村上春樹文学における地震は明白にされている。地震の後、血縁を超えた新しい家族関係は次世代に繋ぐものである。「負の連鎖」を断ち切るのは生き残される人々が背負わなければならない責任だと考えられる。地震がもたらした負の要素を理解したうえ、それを受け入れながら、血縁での繋がりを超えて次世代に物事の真実を見極める客観的な思考を伝えるという成長は求められている。

『神の子どもたちはみな踊る』における阪神淡路大震災と『騎士団長殺し』における東日本大震災を考察した結果として、村上春樹が描く「地震」というテーマに「次世代に繋ぐ」という共通点が見出された。ただ、本稿においては、阪神淡路大震災が起きた神戸が村上春樹の故郷という要素を検討する必要があると感じられた。故郷への思いや愛着に対照しながら、『騎士団長殺し』における東北に対する語りを今後の課題としたい。

台灣日語教育學報第三十一号

テキスト

村上春樹（2000）『神の子どもたちはみな踊る』新潮社

村上春樹（2017）『騎士団長殺し』新潮社

参考文献

河合俊雄（2017）「『騎士団長殺し』における絵画の鎮魂とリアリティ」『新潮』2017 年 7 月号、新潮社

川上未映子訊く／村上春樹語る(2017)『みみずくは黄昏に飛びたつ』新潮社

黒古一夫（2007）『村上春樹　「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版

ジェイ・ルービン著・畔柳和代訳（2006）『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社

松本常彦（2008）「地震のあとで―彼女は何をみていたのか―」『九大日文』第 12 巻、九州大学

村上春樹（1998）『辺境・近境』新潮社

村上春樹（2015）『村上さんのところ』新潮社

村上春樹（2003）『村上春樹全作品 1990～2000③　短篇集Ⅱ』講談社

台灣日語教育學報第三十一号

付記：本稿は 2018 年 5 月 26・27 日に淡江大学で行われた「第 7 回村上春樹研究国際シンポジウム」で口頭発表した論文を加筆・修正したものである。